主婦が独自調査した驚愕結果

「東京江東区に放射能高濃度エリアがあった！」

監修／伊藤隼也（医療ジャーナリスト）

きっかけは、「うちの娘が通う幼稚園の庭の放射線量はどれくらいなんだろう」という主婦の疑問だった。そして出た驚きの調査結果。福島原発から200km以上離れた東京で、放射能汚染は思わぬ形で進行していた。

6月7日、東京都庁記者クラブで行われた記者会見。

NPO「NO！放射能「江東こども守る会」」代表の石川綾子さん（33才）と神戸大学大学院山内知也教授がこう説明し始めた。

「東京都江東区のグラウンドから1kg当たり2300ベクレルものセシウムが検出されました。これは福島県内の小学校の校庭に匹敵する汚染レベルです。またこの場所では、0・25マイクロシーベルト/h以上の放射線量も計測されています」

子供が毎日のように野球やサッカーを楽しむグラウンドで計測された高い放射線量。単純計算だが、0・25マイクロシーベルトは1年間常に外にいた場合、外部被曝だけで年間2・19ミリシーベルトにも達する数値だ。

文科省は5月27日、福島県内の学校で子供が1年間に浴びる放射線量について、年間1ミリシーベルト以下を目指すことを示したが、前出のグラウンド周辺はその1ミリシーベルトを超える放射能高濃度エリアということになる。

独自に調査を行い、その衝撃の結果を発表した石川さんは、4才、3才、1才の3人の娘をもつ主婦。震災以前は、放射能の知識もほとんどなかったという。

「中学校の修学旅行でJCOのある茨城県の東海村に行ったくらいで、それっきり。放射能とか原発とか全然詳しくなかったんです。でも、5月中旬の新聞で、東京の亀戸でかなり高濃度の放射性セシウムが検出されたという記事を見て、いま住んでいる所は大丈夫なのか知りたくなり、行動に移したんです」（石川さん）

夫がインターネットで検索して、放射線計測学を専門にする山内教授に連絡を取った。山内教授は快く承諾してくれたので、長女と次女の通う幼稚園に掛け合い、園内の放射線量についても調べることにした。

しかし、調査をする直前に、幼稚園からは「その話は進めないでくれ」と断りがはいってしまったという。

会見に臨む、石川さん（右から2番目）と山内教授（右）ら。（6月7日）

子供たちを守るためには自分たちが動かなければと、石川さんたちはそれを機に「NO！放射能「江東こども守る会」」を設立。同じような考えを持ったママ友らがあっという間に31人も集まった。

同会が依頼する形で、山内教授らが、5月21、22、25日に江東区内の11エリアで地表や大気の調査を行った。

山内教授とアシスタントの先生、それと会のメンバー約9人で公園や公道、神社などを回りました。いずれも測定器の針が振れて高い数値が出たのですが、**東部スラッジプラントの周辺でより高い数値が出たんです**」（石川さん）

スラッジプラントとは、下水の処理過程から発生する汚泥（スラッジ）を処理する施設。下水道から出る汚泥を濃縮・焼却し、砂を生成。その砂をセメントや建築資材などに再利用している。都内には水道局管理の下にスラッジプラントが2か所、他にも汚泥の焼却施設が10か所存在する。このうち、江東区内で稼働している東部スラッジプラント周辺で高い放射線量が計測されたというわけだ。冒頭の会見で報告されたグラウンドはまさに東部スラッジプラントの目と鼻の先だった。

放射性物質がコンクリートに

しかし、一体なぜ、この周辺で地表でも大気中でも高い数値が計測されたのか。山内教授はこう推察する。

「水が流れずに溜まっている排水溝などを測ってみると、より線量が高かったので、水の汚染が関係しているのではと思っていました。スラッジプラントはまさにその汚染された水が流れ着く先。しかも、そこで濃縮された汚泥が『リサイクル』されているんです」

福島第一原発から飛散してきた放射性物質。雨によってその多くが地上へ落ちていることはこれまでにも報じたとおり。地上に落ちた放射性物質はさらに雨によってちりや砂、ゴミといった不純物と一緒に排水溝を通り、下水へと流れていく。下水は処理が施され、放射性物質を含む不純物が汚泥となって残る。この汚泥がいま現在もスラッジプラントで焼却されているというわけだ。

「放射線にはα線、β線、γ線があります。γ線以外は空気中で短い距離しか飛ばないため、普通なら大気中の放射線を検査する際には測定されないのですが、今回、スラッジプラント近くではβ線までもが検出されたんです。これは大気中を放射性物質が舞っていることを意味します」（山内教授）

神戸大大学院・山内教授

現在、福島第一原発から新たに大量の放射性物質が都内まで飛来するという事例は起きていない。全国各地で計測されている放射線は、地表に

石川さんは、汚染された土壌の改善についての活動も検討している。

落ちている放射性物質から発生しているものと考えられている。しかし、山内教授も驚く事態が起きていた。

「汚染された汚泥を焼却してできた砂は水分が少なくなって濃縮されているわけですから、放射能レベルは格段に高くなる。砂はパウダーのように軽く、それが施設から飛んで大気中を舞っている可能性があるのです。これでは放射性物質を吸い込んで内部被曝してしまうことも考えられるし、雨が降れば新たなホットスポットを作り出してしまうことも考えられます。私の住んでいる神戸では放射線量は通常0・05マイクロシーベルトくらい。ところが江東区では0・2マイクロシーベルトでした。高いところでは0・25ということもあります。これは神戸の5倍にもなるんです」

汚泥の焼却灰から放射性物質が検出されるという事例は、都内だけでなく、北海道や十越、関東近県でも程度の差こそあれ報告されている。顕著なところでは、神奈川・川崎の焼却施設の焼却灰からは、1kg当たり1万32000ベクレル（5月17日）のセシウムが検出された。群馬・前橋では、2万2300ベクレルものセシウムが検出されている。

国は5月12日、福島県に対して、1kg当たり10万ベクレルを超える汚泥は県内で焼却するなどしたうえで、焼却灰は容器に入れて保管すべきとの指針を出した。現在では、福島県以外でも汚泥から1kg当たり10万ベクレル以上の放射性物質が検出された場合、適切に保管するよう国交省は求めている。

しかし、汚染された焼却灰を使ったコンクリートがすでに出回っている可能性もあるという。琉球大学名誉教授の矢ヶ崎克馬さんはこう警鐘を鳴らす。

「広島と長崎の原爆投下後、放射性物質を含んだ黒い雨が広い範囲で降りました。そのとき雨が雨戸などに染み付き、その雨戸に頭を向けて寝ていた子供が脱毛症になったことが記録で残っています。

放射性物質で汚染された汚泥をコンクリートにすれば、当然コンクリート自体が放射線を発することになります。セシウムは半減期が30年と長く、それが建築資材などに使われれば、そこに住む人は、長期的に危険な状態にさらされてしまうでしょう」

さらに、コンクリートは当然いつか劣化する。そうしたことで新たな危険も生み出すことになる。

「コンクリートが劣化し、粉状の破片が出れば、放射性物質が大気を舞うことになってしまいます。それを吸い込んだ人が内部被曝を起こす危険性もあるんです。放射能汚染されたものをリサイクルに使うことはあってはならないのです」（矢ヶ崎教授）

東部スラッジプラントは現在も稼動している。（6月7日現在）

石川さんは震災後、一時的に子供たちを愛知県にある実家に避難させた。いまは都内に戻ったが、外出の際にはマスクをさせ、長袖を着せている。石川さんはこう語る。

「『原発のニュースに飽きちゃった』とか『気をつけるのも飽きちゃった』というお母さんたちの話も聞きます。でも、母として私が子供たちのためにできることは何かを考えたとき、それは子供たちにこれ以上の被曝をさせないことしかないんです」

石川さんや山内教授の会見を受けて、東京都下水道局広報担当者は「これまで当局でもスラッジプラント敷地との境目で空間線量を測っていました。その数値は0・12マイクロシーベルト/hで、会見で発表された数値とは開きがありますが、これから対応を検討していきます」と話した。

石川さんのように母親たちが自ら一歩踏み出すことが、子供たちの未来を安心・安全なものへと導いていくことになる。